

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：平成 18 年度 ～ 平成 21 年度

課題番号：18592416

研究課題名（和文） 子ども虐待を未然に防ぐ予防的家庭訪問プログラムの開発

研究課題名（英文） The development of the home visit program for the child abuse prevention

研究代表者

三輪真知子 (MIWA MACHIKO)

静岡県立大学看護学部・教授

研究者番号：10320996

研究成果の概要：

新生児期早期（4 か月）から 6 か月（10 か月）までの半年間保健師による家庭訪問による介入縦断的研究を行い、子ども虐待を未然に防ぐ予防的家庭訪問には「親の対処能力」、「ペアレンティング技術の育成」、「子どもの発達発育の促進」、「親の社会経済環境整備」について詳細な実態把握ができ、観察できる視点が有効であることが明らかになった。視点が明確になっていることで親子が必要としている支援がしやすく、子ども虐待を未然に防ぐ予防的家庭訪問プログラムの中核になると考えられた。

I performed a study of the intervention vertical section by the home visit by the public health nurse from early (four months) in a half year to (ten months) for six months for the newborn baby period, and it was possible for detailed actual situation grasp about "the measures ability of the parent", "upbringing of the parenting technology", "promotion of the development growth of the child", "the society economic environment maintenance of the parent" for a home visit of the prevention to prevent child abuse, and it became clear that the viewpoint that I could observe was effective. It was easy to make the support that parent and child needed because a viewpoint became clear, and it was thought that it was it in the core of the home visit program of the prevention to prevent child abuse.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
*2009 年度	(727,846)		(727,846)
年度			
総計	2,900,000	510,000	3,410,000

\*2009 年度は繰越承認額

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学（地域看護学）

キーワード：子ども虐待 予防 保健師 家庭訪問 アセスメント項目

## 1. 研究開始当初の背景

2001年にスタートした「健やか親子21」の母子保健国民運動計画内容は「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」の目標に子ども虐待死亡数の減少を掲げている。子ども虐待死亡数は44人（2000年）で、1歳未満の乳児が最も多く、未就学児が死亡の9割を占めている。また、児童相談所報告における児童虐待相談処理件数も23,274件（2001年）と1990年の1,101件の23倍に増加し、3歳未満が多く、未就学児が6割を占めている。2002年厚生労働省は「地域保健における児童虐待防止対策の取り組みの推進について」を通知し、国は妊産婦や親について保健師が家庭訪問等による積極的な支援を実施し子ども虐待を発生から予防する取り組みを推進している。しかし、現状は保健師を中心に市町村保健センター等で1歳6か月・3歳児健康診査、健診未受診者のフォロー、子育てサークルなどを中心に取り組みが行われているが積極的な保健師による家庭訪問は行われていない。都築ら（2002）の研究では産後1か月前後の時期の看護職による家庭訪問は母親にとって有効な育児支援となることが明らかになっている。子ども虐待死亡は1歳未満が多く、相談処理件数も3歳未満が多いことから、家庭訪問は出産直後（以後新生児期早期とする）から保健師が介入し継続的に支援することが子ども虐待を未然に防ぐ取り組みとして有効であると思われるが、系統立てた家庭訪問プログラムがなく、家庭訪問への積極的な取り組みができていない現状である。

欧米諸国では新生児期からの保健師による家庭訪問が子ども虐待の予防に有効であるという研究がなされている。米国ではニューヨーク州エルミナで行われた看護師による妊娠から2歳までの家庭訪問プログラムは、子どもの問題行動の減少、子どもの発達発育の促進、社会資源の活用が増加、子ども虐待件数を減少させることが明らかになった。（Olds 1997年）。英国ではサウスエンド地方で新生児が生まれた全ての家庭1,583世帯を3年間にわたりC.A.R.E（Child Assessment Rating and Evaluation）プログラムに基づき保健師が家庭訪問した。その結果家庭訪問プログラムは子どもの発達を促し、緊急家庭訪問の回数を少なくし、子ども虐待を少なくするのに有効な介入であ

ることを示唆している（Browne 2001年）。これらから、新生児期早期から看護職がプログラム化された家庭訪問による介入は、親の対処能力、ペアレンティング技術の育成、社会経済的環境要因の改善となり、子ども虐待を未然に防ぐことに有効であると示唆している。

日本においては、児童虐待における保健師による母親への支援に関する記述的研究（上野 2003年）があり、子ども虐待事例を家庭訪問した保健師への面接調査の分析から保健師は虐待された子どもだけではなく、加害者である母親をも含めて母親の立場から支援を行っていることが明らかになっている。しかし、新生児期早期から1歳まで保健師がプログラム化された家庭訪問により介入した縦断研究は皆無である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は新生児期早期から4か月から10か月までの6か月間保健師が「親の対処能力」、「ペアレンティング技術の育成」、「子どもの発達発育の促進」、「親の社会経済環境整備」等を達成目標にプログラム化された家庭訪問により子ども虐待を未然に防ぐ予防的的家庭訪問プログラムを開発することである。本研究は親と関わりながら親自身が子どもの発達発育を促す力、親としての育児力等をもにつける親（住民）参画型研究であり、実践現場の保健師と大学が共に研究を推進していく参加型アクション・リサーチの手法をとる。

## 3. 研究の方法

1) 地域で行われている保健師による乳幼児期の虐待予防活動の活動実態及び工夫、その中で保健師の役割や困難点を把握し、乳幼児期の虐待予防の課題を明らかにする。

2) 平成17年、研究者が「児童虐待予防の日英比較研究—アセスメント指標の開発—」（博士論文）において開発した乳幼児家庭訪問における子ども虐待予防アセスメント指標の試案を加筆修正する。

3) 介入する縦断的研究をランダム化比較実験の方法で行う。

(1) パイロットスタディにあたって保健師の家庭訪問におけるアセスメント指標の必要性を理解する研修会を開催する。

(2) 研究者が開発した加筆修正したアセスメント指標が実践現場における家庭訪問で使用できるよう研究参加保健師にパイロットスタディを実施し、アセスメント指標が実際に活用できるシートとする。

(3) RCT により介入研究（研究群はアセスメント指標を使用して家庭訪問した群、対照群はアセスメント指標を使用しないで家庭訪問した群）とする。

6 月末開始から各事例 6 カ月後（6 月末・7・8 月から 12 月末・1・2 月）

#### 4. 研究成果

以上に述べた方法に基づき行った研究の実施実績を述べる。

1) 地域で行われている保健師による乳幼児期の虐待予防活動の活動実態及び工夫、その中での保健師の役割や困難点を把握し、乳幼児期の虐待予防の課題を明らかにした。

全国の市町村保健センター2,516 箇所を対象に郵送による質問紙調査を行った。結果は調査票の配布数は 2,516 箇所、回収数は 606 箇所であった（回収率 24.0%）。今回は家庭訪問（以下訪問と略す）を中心に分析を行った。虐待予防の視点に力を入れた訪問「あり」316 件（52.1%）、虐待予防を視野に入れた観察を家庭訪問時に「している」511 件（84.3%）、訪問時の観察項目は保健師間で共有「している」104 件（20.4%）、「していない」291（56.9%）であった。訪問後のハイリスクの判断は「保健師個人で判断」176 件（29%）、「カンファレンスで判断」372 件（61.4%）、訪問で保健師間共通したハイリスクの親子の判断基準「あり」91 件（15%）、「なし」496 件（81.8%）であった。訪問後フォローしているハイリスク親子の集計「している」143 件（23.6%）、「していない」436 件（71.9%）で、1 年間の訪問後フォローのハイリスク親子の実数は 946 から 0 までであった。訪問は子ども虐待予防の効果が「ある」516 件（85.1%）、「わからない」62 件（10.2%）、「あまり感じられない」18 件（3%）であった。

以上から保健師は約半数が虐待予防の視点で特に力を入れている訪問があり、8 割以上が虐待予防を視野に入れた観察を家庭訪問時にしていることが明らかになった。この事から子ども虐待予防に家庭訪問は重要であると保健師は認識していると考えられる。

しかし、訪問時の観察項目の共有化がなされていない、ハイリスク親子の判断基準がない、フォローしているハイリスク親子の集計をしていない、など客観的、普遍的な観察項目や判断基準の策定、活動評価は課題があると考えられた。

2) 平成 17 年、研究者が「児童虐待予防の日英比較研究－アセスメント指標の開発－」（博士論文）において開発した乳幼児家庭訪問における子ども虐待予防アセスメント指標の試案を加筆修正した。

英国の「子どもおよびその家族のアセスメント・レコード」と日本の 1 歳 6 か月健康診査、先行研究されている乳幼児健康診査時の虐待要因チェックシート、育児機能アセスメントツール、筆者の事例研究の 3 種類を比較検討し、保健師が家庭訪問においてアセスメントする枠組みを考案し、保健師が家庭訪問した際に活用できる、児童虐待予防のアセスメント指標（0～2 歳用）の試案を開発した。

3) 介入する縦断的研究をランダム化比較実験の方法で行った。（A 県 A 市）

(1) パイロットスタディにあたって保健師の家庭訪問におけるアセスメント指標の必要性を理解する研修会を開催した。

目的：子ども虐待予防家庭訪問プログラム開発研究にあつたての概要を理解する。

内容：13:15～14:15

保健師の家庭訪問におけるアセスメント指標の必要性

慶應義塾大学看護医療学部教授 金子仁子  
14:15～14:30

研究の概要と進め方

静岡県立大学看護学部教授 三輪真知子

14:30～15:00

質疑応答

(2) 研究者が開発した加筆修正したアセスメント指標が実践現場における家庭訪問で使用できるよう研究参加保健師にパイロットスタディを実施し、4 か月児用及び 10 か月児用アセスメント指標及び訪問時に活用できるシートを作成した。

アセスメント指標

- A. 親・養育者の育児力に影響を与える児と親・養育者の健康・家族・生活環境
- B. 親・養育者の育児力のアセスメント項目
- C. 親・養育者のメンタルヘルスのアセスメント項目

訪問時活用できるシート

- A. 事例のプロフィール
- B. 子ども虐待予防家庭訪問記録のフォーマット：スタート時の訪問のまとめ（介入群）・（非介入群）
- C. 子ども虐待予防家庭訪問記録のフォーマット（経過・エンド）
- D. 子ども虐待予防家庭訪問記録のフォーマット（サマリ）
- E. 母親の児への愛着のアセスメント項目

(3) RCTにより介入研究（介入群はアセスメント指標を使用した家庭訪問した5人の保健師、非介入群はアセスメント指標を使用しないで家庭訪問した5人の保健師）とし、各保健師は3事例について4か月をスタート、10か月をエンドとした訪問を実施した。

介入群は非介入群に比べ親子の全体像を把握して課題を明らかにし、その課題を構成する要因をアセスメント項目から探り（特に生活場面の理解・子どもの発達発育と親の関わり、親の子どもへの関わり方）の情報を関連づけ統合した上で家庭訪問を実施していた。

以上から「親の対処能力」、「ペアレンティング技術の育成」、「子どもの発達発育の促進」、「親の社会経済環境整備」に基づいたアセスメント指標を用いた家庭訪問は親子が抱える問題を明らかにし、適切な支援ができると考えられ、子ども虐待を未然に防ぐ方法の一つになることが示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 山田和子,前馬理恵,三輪眞知子,金子仁子. 保健師の児童虐待の認識.和歌山県立医科大学保健看護学部紀要.5 (1) ,査読有,1-8. 2009.
- ② 金子仁子,三輪眞知子,増田真也,標美奈子,宮川祥子,渡邊輝美.KEIO SFC JOURNAL. Vol.9 No.2, 査読有, 10-19,2010.

〔学会発表〕（計7件）

- ① 三輪眞知子,金子仁子. 保健師が行う子ども虐待を未然に防ぐ家庭訪問の実態と課題. 第 日本公衆衛生学会（福岡）2007.
- ② 江口晶子,三輪眞知子,玉水里美,岩清水伴美,金子仁子,標美奈子,宇井恭子,高城智圭,渡邊輝美. 保健師活動における乳幼児の虐待発生予防のための生活支援-フォー

カスグループインタビュー調査結果から-. 第11回日本地域看護学会（那覇市）,2008年7月.

③ 三輪眞知子,金子仁子,江口晶子,岩清水伴美. 乳幼児ハイリスク家庭への生活支援の検討-保健師と研究者の協働ケース検討会から-第14回日本子ども虐待防止学会（広島市）,2008年12月.

④ 山田和子,前馬理恵,三輪眞知子,金子仁子. 保健師の子ども虐待に対する認識に関する研究. 第67回日本公衆衛生学会（福岡市）,2008年11月.

⑤ 金子仁子,標美奈子,三輪眞知子,玉水里美,加藤敦子. 保健師が行う児童虐待発生予防について-第3報-虐待発生予防活動の事例調査-. 第67回日本公衆衛生学会（福岡市）,2008年11月.

⑥ Machiko MIWA, Akiko EGUTI, Masako KANEKO, Satomi TAMAMIZU. Actual situation of the child abuse prevention in the maternal and child health care activities in Japan. The 4<sup>th</sup> international conference on community health nursing research 16-20 August 2009 Adelaide South Australia.

⑦ 玉水里美,江口晶子,三輪眞知子,岩清水伴美,金子仁子. 乳幼児虐待予防のための保健師と研究者との共同事例検討会. 第68回日本公衆衛生学会（奈良市）,2009年10月.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

三輪眞知子 (MIWA MACHIKO)  
静岡県立大学・看護学部・教授  
研究者番号：10320996

##### (2) 研究分担者

金子仁子 (KANEKO MASAKO)  
慶応義塾大学・看護医療学部・教授  
研究者番号：40125919

##### (3) 連携研究者

なし